

MEDICA Vol.7

岡山医療健康ガイド メディカ

医のちから ⑦ 肝がん

天和会 松田病院 松田 忠和院長(62)

肝切除手術から6日目。ベッド上で女性(56)は「生」をかみしめていた。転移性肝がんが大きくなり、総合病院で1年4カ月あまり、つらい抗がん剤治療に耐えたが、一向に好転しない。主治医から「がんは難しい位置にあり、切ることもできない。緩和ケア病棟を紹介します」と告げられた。親族に勧められ、いちろの望みを託して診てもらった松田忠和院長は、穏やかな笑みを浮かべ、手術できると請け合ってくれた。女性によると、「今でも本当だろうかとと思うほど、ずばっと決断し、はつきり言ってくれました。そう

手術は成功し、がんはきれいに取り切れた。肝臓の3分の2以上を失ったが、残された部分の予備能はしっかり保たれており、ぐんぐん肝臓が再生中。女性は退院して、もう一度家族と暮らせる日を待ちわびている。松田は駆け出しの1974年に出会った患者のことを、今も忘れない。やはり転移性肝がんだったのが、岡山では切除手術を受けることができず、京都に赴いて命を救われた。肝臓を巡る血管の鋳型を取るとすると、肝臓の形がそのまま浮かび上がる。肝臓は血液の塊のような臓器だ。でたらめにメスを入れれば出血が止まらず、患者はたちまち命を落とす。当時の肝臓外科は黎明期。まだ肝がんに対する切除手術は少なく、5年生存率は1%にも満たなかった。

それだけ難易度が高く、挑戦する外科医が限られた時代。松田は「地元で肝切除ができる医師になりたい」と志を抱いた。勤務先、母校の岡山大学医学部第一外科を経て、85年、父が営む松田病院に移った。交通外傷や労災事故に対応する救急病院だったが、肝臓を中心とする消化器外科の専門病院へ移行。院長を継ぎ、選任を受けた今も、毎日の外来とともに週2日、手術台に立ち、10時間を超える大手術も黙々とこなす。「決して手術が器用な方ではない」と謙遜するが、新しい術式が発表されれば研究を重ねて取り入れる。「頭の中であんといまじをつくれればできるものです」。

何より、手術死(手術から30日以内の死)をこの17年間出していない。近年、肝臓外科が飛躍的に進歩したとはいえ、肝臓は分野で年間1000例近い開腹手術を行う施設として、どこにも引けを取らない成績だ。メスを執るだけではない。松田はがん腫瘍が栄養を取り込む肝動脈に細い管(カテーテル)を挿入して血管をふさぐ肝動脈塞栓術(TAE)、特殊な針を刺して電磁波で腫瘍を焼くラジオ波焼灼術(RFA)も自ら手がける。放射線で体内を撮影しながらカテーテルや針を進める治療は、IVR(インターベンショナル・ラジオロジー)と呼ばれる。現在は放射線科などの専門医が行う場合が多いが、松田はまだカテーテルが普及していない70年代、神戸まで向いて輸入材料を買付け、カテーテルを自作してTAEを行っていた。

手術死17年間ゼロ 「地元で切除を」志貫く



自宅に在る手術室にいる松田忠和院長。手術衣は着き、手術室に在る松田忠和院長

まつだ・ただかず 岡山大学医学部卒。水島第一病院勤務などを経て同学部第一外科助手を務め、1985年から松田病院に勤務。2004年に院長・理事長就任。09年日本対がん協会岡山県支部長感謝状、松岡良明賞受賞。多忙の中で読書は欠かさない。

肝臓の再生力 ギリシャ神話では、プロメテウスはワシに肝臓を食われる刑罰を受けたが、肝臓は1日で再生し、毎日激痛に耐えなければならなかったと伝えられる。古くから肝臓は再生力に富む臓器であることが知られていた。健康な状態の肝臓は70~80%を失っても再生するとされている。

肝動脈塞栓術(TAE) 肝臓には門脈と肝動脈の両方から血液が流れ込むが、がん細胞は主に酸素の豊富な肝動脈から栄養を得ている。TAEでは小さなゼラチンスポンジをカテーテルで肝動脈に詰め、血流を絶つてがん細胞だけを兵糧攻めにする。ゼラチンスポンジは治療効果発現後、自然に溶ける。

外来予約 松田院長の外来は月、火、水、金、土曜日の午前中。原則予約制(電話086-422-3550)。

松田病院 倉敷市鶴形1の3の10 ホームページ <http://www.kctnet.jp/~matuda02/>

写真 渡辺 寛之
文 池本 正人
(敬称略)

「岡山医療健康ガイド メディカ」は第1、第3月曜日付の特集です。簡単に抜き取りができ、保存していただけます。15日付は休刊日の関係で休載、次回は12月6日付です。

主要記事や過去の記事は山陽新聞社のホームページ「岡山医療ガイド」(<http://iryosanyo.oni.co.jp>)でもご覧いただけます。